

Survivors' Diet : Robinson Crusoe's Case

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水間, 千恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/693

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



サバイバーの食卓

——『ロビンソン・クルーソー』の場合——

水 間 千 恵

はじめに——ロビンソン変形譚と「食」

ロビンソン変形譚とは、ダニエル・デフォー (Daniel Defoe) のいわゆる『ロビンソン・クルーソー』(正式には、『ヨークの船員ロビンソン・クルーソーの生涯と前代未聞の驚異的な冒険の数々』*Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe of York, Mariner*, 1719) の影響を受けて創作された物語(群)を指す言葉である。より具体的には、無人島やそれに類する場所を舞台にしたサバイバルストーリーのことであり、そのような作品群全体に与えられた文学ジャンルとしての名前でもある⁽¹⁾。その始祖たるデフォーの作品は、原著自体が出版後早い段階から子どもたちに受容され、日本でも明治期以降現在に至るまで子ども向けのバージョンが途切れることなく翻訳出版されつつづけている。つまり、そもそも

大人向けに出版された小説ではあっても、今や子ども部屋の本棚に確固たる位置を占める作品といってもよい。

著書の成功に気をよくしたデフォーは、同年及び翌年に計二冊の続編を出版したが、今日、『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*)の名で知られているのは、一般的には第一部の内容であり、その核心は、孤島に漂着した主人公がさまざまな困難を乗り越えて生き延びていくというプロットにある⁽²⁾。「ロビンソン変形譚」という言葉で一括りにされる物語群も、これをなぞる形でストーリーを展開するのが常である。もちろんバリエーションは多彩である。たとえば、サバイバーは一人とは限らず、描かれる人間関係もさまざまである。幸運にも友人や家族がまとめて島にたどり着く作品もあれば、まったく見ず知らずの他人との共同生活を描いた作品もあり、恋が芽生えることもあれば、殺し合いが起きることもある。舞台についても、海に浮かぶ無人島だけでなく、荒野や氷原はもちろ

んのこと、宇宙ステーションから人類が絶滅した近未来や異世界まで多岐にわたる。

始祖『ロビンソン・クルーソー』の出版から三〇〇年近くになるが、この間、デフォー自身は想像もしなかったであろう、宇宙や核戦争後の世界を舞台にした変形譚までもが誕生した背景には、科学技術の発展や大国間の軋轢といった外的要因が大きく影響を及ぼしていることは言うまでもない。この例からもわかるとおり、ロビンソン変形譚の変化には、それぞれの作品を生んだ社会の変化が多かれ少なかれ反映されている。そもそもこのジャンルに属する作品は、テーマ、プロット、状況設定等を共有しているがゆえに比較素材としての適性をもつ。本稿は、そのようなジャンルの特性を活かし、作品に登場する「食」という共通要素に着目することによって、日本で出版されてきた（翻訳を含む）子ども向けの変形譚の変化を探るといふ取り組みの一環として、ジャンルの始祖たるデフォーの『ロビンソン・クルーソー』について考察するものである。

一般に無人島やそれに類した場所でのサバイバルストーリーと聞けば、窮乏生活体験談を想像しがちであるが、実際に日本で出版されているさまざまな変形譚を確認してみると、このイメージは大きく揺るがされることになる。変形譚の歴史を紐解くと、艱難辛苦の末に豊かになるサバイバーのみならず、最初から大量の物資を持ち込んで豪華な生活を送る者や、自然の恵みを享受して大した努力もせずに安楽に暮らしていく者も少なからず登場するからである。子

ども向けの作品に限定すれば、餓死の恐怖と戦いながら食べものを入力するために奮闘する主人公を描く作品よりも、むしろ、楽しいキャンプ暮らしや楽園生活を満喫する幸福な主人公を描く作品のほうが多いくらいである。この事実を目を向ければ、サバイバーが「いつ」「何を」「どのように」食べたのかという情報が、その作品のテーマそのものに直結することがわかるだろう。また、食べものに関する記述は、多分にその作品を生み出した社会や文化を反映したものになっているはずである。「食」というキーワードを設定してロビンソン変形譚を分析することの意義もここにある。すなわち、社会や文化との関わりから物語を読み直すことによって、作品もつ新たな一面に光をあてること、これが本研究の主目的である。本稿はとくにその起点として、後代の変形譚分析のための論点を抽出することに重きを置く。

一、ロビンソンの実像

ここで取り上げる岩波少年文庫の『ロビンソン・クルーソー』は、訳者による省略と編集が部分的にみられるものの、子ども版としては最も詳細な翻訳書の一つで、原著第一部の内容をほぼ網羅した内容になっている。物語は、ドイツからイギリスに渡って成功した商人の息子ロビンソン青年が、父母の制止を振り切って家を飛びだし、一山あててやろうと夢見て船出するところから始まる。故郷から海

路でまずロンドンを目指したロビンソンは、暴風雨に巻き込まれて自らの浅はかなふるまいを一度は心底悔いるものの、船が無事港に着いたとたんに殊勝な気持ち忘れ、儲け話に心を動かされてたまたまや船に乗りこむ。やがて、アフリカ沿岸で交易に従事する商人として独り立ちするが、それもつかの間、海賊に捕らわれた挙句、イスラム教徒の奴隷として二年余を過ごす羽目に陥る。ようやく逃亡して南米大陸にたどりつくと、行動を共にしていた黒人少年を売り飛ばすことで資金を得て、それを元手に農園経営に乗り出している。そして、その新事業が軌道に乗り、安上がりな労働力として黒人奴隷を仕入れようとアフリカに向かったところで船が難破し、長い孤独な孤島生活へ突入することになるのである。

抄訳や翻案のみに接していると、「無人島を独力で切り開いた孤高のヒーロー」というイメージさえ抱いてしまうロビンソン・クルーソーであるが、このように「前史」をきちんと確認すると、親不孝な放蕩息子あるいは利に敏い商人といった別の顔が見えてくることになる。たしかに、孤島生活部分のみを読めば、孤独に耐えながら生き延びるために地道に働く主人公の姿がクローズアップされるため、ロビンソンは俗世を離れた求道者のように見えるかもしれない。とくに、難破船で発見した金貨や銀貨に対して、ロビンソンが「無用の物」という評価を与えるエピソードなどを読めば、その感はいよいよ強くなるだろう。だが実際には、彼はそのお金を船から運び出してしまっておき、二八年後に帰国するときに持ち帰って使っ

ているのであるから、俗世にとっぶり浸りきった實際家というのがロビンソンの実像なのである。

さて、そんなロビンソンが島に漂着したときに身につけていたのは、ナイフ、パイプ、タバコ入れだけであった。しかし幸いなことに船は泳いで到達できる場所で座礁しており、多くの物資を救い出すことができている。そのうち食糧については、ビスケット（大樽）、米、オランダ・チーズ（かたまり三つ）、ヤギの干し肉（五切れ）、穀物（少々）、酒類各種（ラム酒・アラック酒ほか）、砂糖（一箱）、小麦粉（樽）の八品目が挙げられている。樽単位、箱単位で運び出したものもあり遭難者としてはそれなりに恵まれていることがわかる。実際、儉約しながら食べていたとはいえ、七か月後にもまだビスケットが残っていたという記述があり（一一二頁）、ラム酒に至っては二三年後にもまだかなり残っていたとされている（二一七頁）。持ち出したのは食糧だけではない。彼は二四日間にわたって毎日のように陸と船を往復して、衣類、道具類、銃器といった積み荷もちろんのこと、索具や帆布といった装備品や船の建材まで、手で持てるものはすべて運び出し、住まいと定めた洞穴に収納している。「わたしの洞穴を人が見たら、生活必需品の大倉庫と思っただろう」（八七頁）と誇らしげに述べていることからわかる通り、彼は、生きていくうえで必要な品の多くを無人島生活の初めから手にしていたといえる。

しかも、ロビンソンが上陸したのは熱帯の島であった。雨季と乾

季があるとはいえ、総じて気温は高く、植物も生い茂っている。本人は当初「不毛の島」(六六頁)という言葉を口にしてはいるが、少し内陸に足を踏み入れれば「すべてが生き生きとして、青々と新鮮な春のさかりのようで、手入れのよくいきとどいた庭園」(一二三八頁)を思わせる谷間があり、ブドウ、オレンジ、レモンなどの見慣れた果樹も自生していたのである。また、狩猟に必要な銃器や火薬は揃い、足りない物を作るための道具類にも恵まれていた。このためロビンソンは、持込食糧が尽きるまでに食糧の生産体制を整えることもできたのである。しばらくすれば、野生のヤギを捕まえて飼育することによって肉だけでなくチーズやバターを自給するようになり、麦の収穫を順調に増やしてパンを焼くこともできている。結局のところ、元祖ロビンソンは二八年間にも及んだ孤島生活において飢餓状態に陥ることは皆無であり、真の意味での窮乏生活を経験したわけではない。こうして食糧事情を確認してみると、またもやロビンソンのイメージと実像の落差が見えてくるのである。ロビンソンがこのように豊かなサバイバーであったことについては、のちの変形譚のなかでもしばしば皮肉まじりに言及されている³⁾。

二、ロビンソンの食糧調達活動

大量の物資を島に持ち込み、恵まれた状況でサバイバルを開始したロビンソンは、孤島生活二年目にして早くも誇らしげに、「ロン

ドン

のレドンホール市場といえども、わたしほど豊かに食卓をにぎわすことはできなかっただろう(中略)たんに豊富というだけでなく、美味でもあったのだ」(一五一頁)と述べている。では実際に彼はどんなものを食べていたのだろうか。

ロビンソンが島に上陸してから最初の一年分の食事に関する記述をまとめたのが別表①である。これを子細にみると大変興味深い事に気づかされる。ロビンソンは、難破船から最初の荷物を陸揚げした直後に運んできた銃を使って鳥を撃ったのを皮切りに、肉を確保するための狩猟活動にいそしみ、猟に出られない時に困らないよう、上陸三か月後には早くもヤギを飼いはじめている。その後、偶然発芽した穀物の世話をして収穫まで行い、そのちに初めて、果実類を現地調達している。つまり、彼の食糧調達活動は「狩猟→農耕牧畜→採集」という順で変化しているのである。通常であれば「単純な方法から複雑な方法へ」、つまり、「採集→狩猟→農耕牧畜」という変化を示すものであり、採集活動を一切せず狩猟から着手するというのは、変形譚の歴史において非常に珍しいパターンである。ロビンソンの食糧調達活動を特徴づけるこの奇妙な変化については、「銃」という道具があり、彼にそれを使いこなす「技術」があり、島には「獲物」があった、という諸条件が重なった結果にすぎないという意見もあるかもしれない。しかし、同様の条件を満たしているほかの変形譚で事情が異なっていることがそのような結論を否定するだろう。たとえば、ヨハン＝ダビット＝ウィース(Johann

別表① ロビンソンの食事（最初の1年分）

1659年9月30日	無人島に漂着
10月1日	船でビスケットとラム酒を口にする（→同日、タカのような鳥を撃つも肉はくさくて食べられず）
～10月24日	荷揚げ（食糧はビスケット、米、オランダ・チーズ、ヤギの干し肉、穀物、酒類、砂糖、小麦粉）と住まいの整備
10月31日	母ヤギを撃つ。いっしょにいた子ヤギも後日食糧にする
11月3日	カモに似た鳥を撃つ
11月4日	1日のスケジュールを決める（仕事、狩猟、睡眠、休養）
11月5日	ヤマネコを撃つが、肉は臭くて食べられず
11月14～16日	種類不明の大きな鳥を撃つ（非常に美味）
11月18日～22日	毎朝銃を持って外出。必ず食べ物を仕留めて帰る
12月27日	子ヤギを撃つ（怪我をした別の子ヤギを連れ帰り、食用飼育を始める）
1月3日～4月1日	毎日森で獲物を探し、度々嬉しい発見。（野生のハトのヒナは美味）
2月ごろ？	稲と大麦を発見（偶然発芽したもの）
4月16日	大地震が起き、動揺を鎮めるためにラム酒を飲む
4月30日	ビスケットの減少に危機感を覚え、以後1日1個と決める
5月4日	釣りに出るが不漁（これ以前は食べたい量は釣れていて、干物にしていた）
5月1日～6月15日	難破船が地震やハリケーンにより、浅瀬に打ち上げられていたため、物資探しを行う。ブタ肉の大樽を発見するが海水が入り食用にならず
6月〇日	大麦の収穫（これを種麦にして、以後も栽培を続け3年後にパンを作る）
6月17日	前日発見したウミガメを解体調理（ヤギと鳥以外初めての肉）。カメの体内に卵を60個発見
6月26日	発熱を押して雌ヤギを撃ち焼いて食べる。スープにしたかったが鍋がない
6月28日	病後で衰弱中。ラム酒入りの水、ヤギの肉、カメの卵を食べる
6月30日	狩りへ。ガンに似た鳥を仕留める。カメの卵を食べる
7月15日～8月14日	食材探しに出かける。カサヴァ（根菜）を探すも発見できず。メロン、ブドウを発見。ココア、オレンジ、レモン、シトロン、ライム等の樹木も発見。ライムとレモンを持ちかえる。ブドウは干し、約200房を備蓄。ライムはその後水にまぜて常飲する
8月14日～8月26日	ヤギ、ウミガメを捕獲 標準献立は「朝：干しブドウ、昼：ヤギかカメの肉をあぶったもの、夜：カメの卵二～三個」
9月30日	上陸1周年記念日 断食を行う 日没後ビスケット1切と干ブドウ1房を食べる

David Wyses) の『スイスのロビンソン』(Der Schweizerische Robinson, 1812-27) では、海岸でとった牡蠣が持込食糧とともに最初の食卓に載っており、ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne) の『二年間の休暇』(Deux Ans de Vacances, 1888) では、上陸早々に貝が集められている。『ロビンソン・クルーソー』とほぼ同時期から日本の子どもたちに親しまれてきたこれらの作品でも「銃・技術・獲物」が揃っているのである。これら同一条件の作品と並べてみれば、身近なところで集められるものを探そうとする意志を全く示さないロビンソンの行動の奇妙さがあらためて浮き彫りになる。

さらに、ウィースやヴェルヌの作品では、魚介類がしばしば食卓の主役を務めているうえに、根菜から葉物まで野菜が数多く具体的に紹介されるが、『ロビンソン・クルーソー』の場合は魚に関する言及はわずか一箇所しかなく、しかも肉のように具体的な種類が説明されることはない。生活が落ち着いた頃に「カブとニンジン」や「エンドウとインゲン」への渴望を口に出していることから(一七三頁)、ロビンソン自身が偏食家でなかったことは明らかである。だが、物語のなかで言及される魚介類や植物由来の食材名を並べてみると、別表②に挙げたウィースやヴェルヌ作品の場合とは大きな開きが生じることがわかる。結局のところ、食糧調達活動自体に注目すれば、ロビンソンの場合は何の肉を得たかという話に終始しているのである。ここから浮かび上がってくるのは、極端な肉食サバイバーとしてのロビンソン像である。

別表② 『スイスのロビンソン』と『二年間の休暇』で現地調達された魚介類と植物由来の食材名(最初の1年分)

ウィース『スイスのロビンソン』	ヴェルヌ『二年間の休暇』
<p>【魚介類】 カキ、海ザリガニ、名称不明の魚、川カニ、ニシン、チョウザメ、サケ</p> <p>【植物】 ヤシの実、サトウキビ、イチジク、ジャガイモ、パインナップル、マニオク(=カサヴァ)、レタス、サラダ菜、メロン、豆類(インゲン、エンドウ、ソラ豆、ナタ豆)、キャベツ、トウモロコシ、ゴヤヴェ、カシの実、キュウリ、穀類(大麦、小麦、ライ麦、カラス麦、イネ)、松の実</p>	<p>【魚介類】 ムール貝、ハマグリ、カキメルルーサ、小魚類、ガラクシア、マス、カワカマス、サケ</p> <p>【植物】 ツルコケモモ、セロリ、クレスソン、トルリュカ、アルガローバ、ウィンターズ、ペルネッティア、砂糖カエデ、カサマツの実 (なお、持込食糧には「野菜の缶詰」が含まれ、ヤマノイモの栽培を試みたが失敗したことが明かされている)</p>

(『ロビンソン・クルーソー』については別表①の下線部参照)

実はこの点については、彼が食卓自慢をするために引き合いにだしていた「レドンホール市場 (Leadenhall Market)」という名前からもある程度想像のつくことであった。金融の中心地シティのそばにあるこのマーケットは、今でこそ洒落な様相を見せているが、デフォアの時代には牛・家禽を中心とした食肉市場だったのである。つまり、ロビンソンが満足感を表明していたのも、食材一般というよりは、肉の調達状況に対してだったと考えられるのである。しかも、彼が日常的に食していたウミガメは当時のロンドンでは高級食材であり、野禽も狩猟の法規制によって特定階層の人々以外には入手困難になっていた。つまり、ロビンソンの食生活は、同時代の読者には誇るに足る内容と思われた可能性が高い。

時代による「食」に対する感覚のずれについてよくわかる例をもう一つ指摘しておこう。先に挙げた持込食糧八品目と、別表①に挙げた現地調達食材を並べると、ロビンソンの食事は、現代であれば間違いなく「野菜不足」の烙印をおされるような内容である。だが、一七世紀から一八世紀にかけてロンドンで暮らしていた英国紳士たちの生活に照らすと、ロビンソンの食卓がけっして特異なものではなかったことがわかる。たとえば、海軍省の役人だったサミュエル・ピープス(一六三三—一七〇三)が書き残した食事の記録には、牛、羊、兎、豚、家禽、野禽など多種多様な肉が次々と登場し、しかもしばしば複数種の肉が一度に食卓に並んでいる。牡蠣や鮭などの海産物やハウレンソウやアスパラガスといった野菜も散見され

るものの、肉類の登場頻度とは雲泥の差がある^④。このように当時の英国紳士の食卓が肉の豊富さによって特徴づけられていたことについては、外国人の証言も数多く残されており、歴史家のなかにはデフォア時代の英国を「肉食の国」という言葉で説明する者もいる^⑤。もちろん貧しい人々が同様の食生活を享受できたはずはない^⑥。副業についてわざわざ書かなかっただけのことではないのかと疑う余地もある^⑦。しかし、仮にそうだったとしても何について記し、何について記さないかという判断基準そのものもまた、食に対する人々の考え方を示す資料となりうるだろう。少なくとも紳士と呼ばれた人々が、肉を食卓の主役だと考えていたことは当時の記録から見えてくるのである。つまり、ロビンソンの食卓の特殊さは彼個人の嗜好の問題というよりは、彼が属した社会の食事情や食に対する考え方を反映したものだということになる。

三、なぜロビンソンは野菜を食べなかったのか

以上のとおり、元祖ロビンソンは極端な肉食サバイバーであり、その食糧調達活動は特色あるものになっていた。その一因は、彼を育んだ社会の食文化に求めることができるが、ほかに考慮すべき要素がある。サバイバー側の条件、すなわち、ロビンソン自身の知識量である。初めて食材探しの遠出をした際、ロビンソンは、代用パンの材料になる根菜(カサヴァ)を探そうとするが見つけること

ができず、大きなアロエを発見したものの使用法を知らなかったため有効活用できなかったと述べている（一三六頁）。岩波少年文庫では省略されているが、原著ではこれに加えて、ブラジル在住時に観察することがほとんどなかったため、野の植物に関する知識がなかったと告白する一文もある^⑧。つまり、食事内容が極端に野菜不足だったのは、それらを現地調達するための知識という点でロビンソン自身に問題があったという面が否定できないのである。

だが、もう少しつきつめて考えれば、このような個人の能力という問題もまた社会の変化と無関係ではないことが見えてくる。たとえば、先に挙げた『スイスのロビンソン』は家族六人のサバイバルを描いた作品だが、現地調達する食材は『ロビンソン・クルーソー』と比べて格段に多種多様で、その食卓も豪華である。一家の豊かな食卓は、持込食糧のみならず、ことあるごとに動植物に関する知識を披露する父親の存在によって支えられている。たとえば、元祖ロビンソンが見つけることのできなかったカサヴァも、スイス人一家の場合は、子どもが掘りおこしてきた正体不明の根菜を父親がこれと特定し、毒のある種類かどうかを判別したうえで、「すりおろす、灰汁をしぼる、動物に毒見をさせる、焼き上げる」といった調理過程までを含めて指揮監督し代用パンを作り上げている（九五〜九六頁、一〇一〜〇五頁）。このように博識なサバイバーが登場し、自然界に関する情報提供に紙幅が割かれるのは、『スイスのロビンソン』のみならず一九世紀の変形譚に共通して見られる傾向であり、

そこには、一八世紀後半からヨーロッパにおいて急激に高まった博物学への関心が反映されているのである。^⑨『二年間の休暇』には、さらにはっきりとデフォー作品からの時代の変化を感じさせるエピソードが挿入されている。子どもばかり十五人のサバイバル生活を描いたこの変形譚には、「健康のための食」という概念が登場しているのである。具体的に言及されているのは「新鮮な野菜」の不足に対する懸念であり、対策として自生していたセロリやクレソンなどを採集して食べたという記述が見られるのである（上巻二七三頁、下巻二二頁）。とりわけ、クレソンについては「地表に目を出したばかりの若芽が壞血病のよい薬になる」（上巻二七三頁）と説明されている点が注目に値する。

壞血病とは、大航海時代以降、船乗りたちの職業病のように考えら恐れられてきた病である。皮膚の裂傷、潰瘍、出血、関節痛、歯や毛髪の脱落、幻覚、失明などの症状を経てやがては死に至るこの病が原因で、たとえばヴァスコ・ダ・ガマの航海（一四九七〜九九九）の際には、一六〇人の乗員のうち一〇〇人が落命したといわれている^⑩。これがビタミンCの欠乏によって引き起こされることは二十世紀に入るまで特定されなかった。もちろん、原因が特定される前から、経験に基づいたさまざまな対処法は提唱されており、そのなかには、のちに振り返ってみれば適切だった方法もあった。たとえば、東インド会社の船医だったジョン・ウッダールは、早くも一六一七年に柑橘類の効用を説いている。しかし、彼の意見は広く受

け入れられるにいたらず、その結果、イギリス海軍提督ジョージ・アンソンが率いた世界周航の旅（一七四〇～四四）では多くの死者を出すに至った。この航海では、一九〇〇人超の要員のうち一四〇〇人以上が命を落とし、その多くが壊血病の犠牲者だったといわれている。そのような状況下で、若きスコットランド海軍軍医ジェームズ・リンドは、一七五三年に科学的実験に基づいて柑橘類の効用を主張する論文を発表し、その後も、新鮮な野菜を船内で栽培する方法なども含めて壊血病予防策を提案した。しかし、海軍省が正式に壊血病対策に着手したのは、それから四十年以上ものち、一七九五年のことである。¹¹

要するに、デフォアの時代には原因不明とされていた病への対処法がヴェルヌの時代には確立していたという事実、それが両者の作品における食に関する記述の違いを導き出す一因となっていることがこの例からうかがわれる。このように見てくると、肉食一辺倒にみえる元祖ロビンソンの食卓は、彼が生きた時代によって大きな制約をうけていることがよくわかる。

四、肉食サバイバーが恐れたもの

ロビンソンが肉以外の食材を探しに出かけるのは、漂着から十か月目に入ってからである。これほど長い期間本格的な食材探しに出かけなかったのは、すでに述べたように、身近なところで彼にとっ

て最も重要な食材である肉が入手できなかったからであるが、さらにもう一つ理由があった。この間、彼は難破船からの荷運びや住いを整えることに全力を傾けていたのである。彼は当初こそ小高い山を背にした平地にテントを張りそこで寝起きしていたが、二か月ほどかけて荷運びを終えたのち、倉庫、台所、食堂の使途に供する洞穴作りを思い立ち、岩のくぼみを掘りはじめる。船から持ち出した物資にはこの作業に必要な道具が含まれていなかったため、まずは四日間かけてツルハシ、シャベル、手押し車の代用品を用意し、十八日かけて洞穴を完成させ、その後も補強作業を断続的に続けていたことが文面からうかがわれる。しかし、最も時間をかけたのは「砦」作りである。それは、テントを基点に、先をとがらせた杭を半径十ヤード（九メートル強）の半円形に配するという大掛かりなものであった。しかも、六インチ（約十五センチ）ほどの間隔をあけて杭をもう一列並べることによってフェンスを二重にし、一列目と二列目の間には船から運んできたケーブルを積み重ねて補強するという念の入れようである。杭の高さは、地上に出ている部分だけで五フィート半（一八〇センチ強）に達したとされている。しかも入口をわざと作らず、ロビンソン本人が出入りするさいには梯子を用いて、必要な場合にはその梯子を収納できるような仕掛けにしてあった。彼は三か月以上（一月三日から四月一四日まで）もこのフェンス作り

に時間を費やし、その後もさまざまに手を加えつづけている。

ロビンソンが堅牢な砦を作ることこだわったのは、ひとえに、

外敵に対する恐怖ゆえのことである。たとえば、彼は上陸初日に次のように述べている。

(中略) 食べもの、住居、衣服、武器、避難所など、なにひとつなく、救い出される希望もない。野獣に食われるか、蛮人に殺されるか、あるいは餓死するか、とにかくわたしを待っているのは死のみである。夜になったので、野獣の襲撃をさけて木の上で寝た。(八九頁)

ここで吐露されているのは、「食われることへの恐怖」と「食えなくなることへの恐怖」である。上陸初日に抱いた「食いたい、しかし、食われたくはない」というこの気持ちが、ロビンソンの以後の行動様式を決定づけることになる。つまり、食わなければならぬがゆえに食糧調達に精をだすいっぽうで、食われたくないがゆえに安全な住まいづくりに執念を燃やすことになったのだ。上陸初日には、右のとおり「野獣」を恐れて木の上で一夜を過ごしたロビンソンだが、砦を建設する際に心配していたのは「野獣か蛮人におそわれはしないか」(九二頁)ということであった。ところが、上陸から一年を過ぎるころには「この島の最大の野獣はヤギで、恐れなければならぬ生き物はほかにいないようである」(一四三頁)と結論づけている。つまり、この時点で彼が警戒しているのは、「蛮人」のみになっているのである。しかも、次の一節からもわかると

おり、ロビンソンは「蛮人」を「獣」よりもはるかに恐ろしい存在だと考えている。

かれらはアフリカのライオンやトラよりも凶悪な存在である。ひとたびかれらの手に落ちれば、十中八九殺され、食べられてしまうだろう。カリブ海沿岸の住民が人食い人種であることは話に聞いているし、緯度から判断して、この場所がその沿岸からさほど遠くないことは明らかだった。(一六八頁)

ここに登場している「カリブ」という地名にも重要な意味がある。当時、西欧諸国においてそこは食人種の土地として知られていたからである。ことのおこりはコロンブスの第一回航海(一四九二〜九三年)である。西インド諸島に到着した彼は、「カニバ」あるいは「カリブ」と呼ばれる種族のうわさを耳にし、航海日誌に「その辺り一帯の島々を荒し、住民を捕獲しては食べることから、凶暴な人間にちがいない」という内容の記述を残したのである。日誌における食人種に関する話は、すべて伝聞であり、コロンブス自身がその場面を目にしたというものはない。しかも彼の航海日誌は原本が失われており、今に伝わるのは、それを讀んだドメニコ会修士がまとめた要約のみであるため、この記述がどこまで原本に忠実だったのかも実のところ定かではない。しかしコロンブスの航海以後、「カリブ族＝食人種」というイメージはヨーロッパでは定着してい

くことになったのである。英語で食人種を指す「カニバル (cannibal)」という言葉も、現地語の「カリブ (carib)」から変化したものである。もとはといえば、ロビンソンのモデルとなったスコットランド人船乗りアレクサンダー・セルカーク (Alexander Selkirk) が四年四か月にわたって孤島生活を送った場所は、太平洋側のファン・フェルナンデス諸島 (Juan Fernandez Islands) の一つであった¹³⁾。舞台をわざわざカリブ海域に移して物語化したことを考えても、食人種テーマがデフォーにとっていかに重要であったかがわかるだろう。

そもそも豊かなサバイバーだった元祖ロビンソンが、孤島生活の大部分を飢餓とは無縁に過ごしたことは既に述べたとおりである。つまり、彼にとって真の脅威は「食えないこと」ではなく「食われること」だったといえる。しかも、彼の警戒心は「野獣に食われること」ではなく「蛮人に食われること」に向けられていたのである。こうして見てくると、「無人島を独力で切り開いた孤高のヒーロー」にも思えた人物のもう一つの顔、「自分が食肉となる可能性に気づいて脅える肉食サバイバー」という実像が浮かび上がってくるのである。『ロビンソン・クルーソー』に登場する食人種について、ピーター・ヒュームは次のように述べている。

テキストがカニバリズムという「現実」を紡ぎ出すにつれて、
仮説的な自我は自己認識を強化していく。この自我は、自分が

何者であるかは確認できないとしても、自分が食人種でないということだけは知っているのである。クルーソーが完全に自我を構成するのはこの瞬間である。いまや彼は植民地的冒険者として行動する準備ができた¹⁴⁾。

食人種という存在が、西洋近代の主体構築のために捏造された他者であるというのはいいとしても、いるかどうかさえわからない食人種を捏造したその歪んだ想像力は、いったいどこから生まれてきたのだろうか。それは、ほかならぬ肉食者としての自分たち自身を反映したものではなかったのか。ロビンソンが自己定義をするのに、火を噴く怪獣や一つ目の巨人ではなく、食人種を持ち出さねばならなかったという事実に着目するとき、彼自身の肉を求める気持ち、食人種への恐怖と表裏一体のものと気づかされる。そもそも、ヨーロッパでは中世以来、「肉は力の源であると同時に、悪の源」だとみなされていた¹⁵⁾。だからこそ、教会が節制の対象とした食べものもまずは肉であり、断食とは獣の肉を断つということを意味していたのである。とりわけイギリスでは、一六世紀以降宗教的な動機だけでなく漁業奨励と海軍力増強という政治的な意図もあって、国家をあげての「断食」奨励が繰り返されていた。このような背景をふまえると、ロビンソンが上陸一周年目にあたる記念日に「神への感謝」を断食という行為で示したことも看過できない。別表①からわかるとおり、彼の断食もまた、その実体は「肉を口にしない」ことなの

である。

五、ロビンソン変形譚における肉食モチーフの展開

以上の通り、「食」に着目して『ロビンソン・クルーソー』という作品を読み直すと、「肉食サバイバーが食肉となることを恐れる物語」、すなわち、「我が身の悪を、我が身に降りかかるかもしれない悪へとすり替えた物語」という解釈が浮かびあがってくることになる。実際、この「肉食モチーフ」に着目して変形譚の歴史をたどると、このジャンルにおける「悪」の主題の変化が見えてくることになるのである。これを無自覚に継承したロバート・マイケル・バラントイン (Robert Michael Ballantyne) の『やんち島の子少年』(The Coral Island, 1858) と、自覚的にねじまげたウィリアム・ゴールディング (William Golding) の『蠅の王』(Lord of the Flies, 1954) はその代表例であるが、これらについてはかつて他所で論じたため¹⁶⁾、ここでは「食」という観点で補足的な指摘をするにとどめたい。最も重要な点としては、サバイバーの肉への渴望と食人種への恐怖がセットで語られること、豚のイメージの利用、の二点を挙げるができるだろう。

まずは『さんご島の三少年』であるが、これは三人の少年水夫が南太平洋の島に漂着し楽園生活を楽しんだのち、「悪い、食人種を倒し、良い、原住民とは友達になって」意気揚々と帰国するという物語

であり、そのご都合主義と能天気さにおいて、戦前日本の少年向け南洋小説に通じる作品である。持込食糧ゼロ、それ以外にも役立つものはほとんど何も持たずに島にやってきた少年たちは、ヤシの実、牡蠣、パンノミ、タロイモ、ヤマイモなどを労せず次々と手にして飢えを感じる暇もない。にもかかわらず、すぐに魚介類や植物だけでは満足しきれなくなり、「なにか動物の肉をとるひつようがある」(六五〜六六頁) と言いはじめ狩りに出かけるのである。しかも、食人種たる野蛮人に対する少年たちの具体的な恐怖が語られるのは、仕留めた獲物を食べているまさにその席でのことなのだ(九五頁)。このように、『さんご島の三少年』においても肉への渴望と食人種への恐怖は並置されているのである。元祖ロビンソンの食卓では、メインは山羊の肉だったが、さんご島に流れ着いた少年たちの食卓に載るのは「キリスト教世界において根本的に差別されてきた」¹⁷⁾「カニバリズムの幻想がつきまとっている」動物、「豚」の肉である。しかも、物語のなかではわざわざ「ぶたの丸焼が人間の丸焼によくにてるもんだから、やつらは人間の丸焼のことを『長ぶた』というらしい」(二〇九頁) との説明が挿入され、豚肉と食用になりうる人間の肉との互換性が強調される¹⁸⁾。

豚にまつわるこのようなイメージをさらに効果的に用いたのが、ゴールディングの『蠅の王』である。物語は、核戦争が勃発して避難のために少年たちだけを載せた飛行機が南太平洋の無人島に不時着(墜落)したところから始まる。元祖ロビンソン以来、変形譚で

は「洗礼」や「再生」を象徴するかのようには、サバイバーが海にのまれてから孤島にたどり着くのがおきまりだったが、ここでは「天上の楽園からの転落」を思わせる「落ちる」という設定が導入されているのである。食べものに関する記述も、不吉な象徴性に満ちている。最初に言及されるのは、下痢を引き起こす果物と腐りかけたヤシの実についてである。ヤシの実はご丁寧にも、「転がっている頭蓋骨のような」(二〇頁)と付け足されている。島の豊饒さが楽園性の象徴でもあった『さんご島の三少年』に対して、『蠅の王』では、腐敗・墮落を思わせる「過剰なる豊饒さ」が描かれる。このような環境下で、少年たちは最初から肉への渴望を口にし、狩猟隊を結成して豚狩りを行う。その活動と並行して、自分たちを食べにくるかもしれない「獣」に対する恐怖が蔓延していくのである(五六〜五八頁)。この作品に食人種としての原住民は登場しないが、戦化粧をして裸で槍を手に豚を追いまわし、涎をたらしながら肉をむさぼり食う少年たちが「野蛮人」食人種」の役割を自ら果たしている。さらには、豚だけでなく仲間をも狩り立てて歯と爪で引き裂いて、殺してしまうその姿には「獣」のイメージも重ねられ、これを補強するかのようには、犠牲者の一人にはわざわざピギー(Piggy=ぶたっ子)の名が与えられている。つまり、元祖ロビンソンが自我確立のために捏造した「食人種」としての他者の姿は、『蠅の王』において自らのうちに見事に引き戻されているのである。

六、おわりに代えて

——戦後の子ども向け変形譚と肉食モチーフ

ノーベル賞作家ゴールドディングのデビュー作『蠅の王』は、もちろん子ども向けに書かれた作品ではない。だが、『さんご島の三少年』をはじめとする子ども向けの変形譚を批判的に書き直す意図をもって執筆されているという点において、子ども向け変形譚の歴史を考える際に無視することはできない。また、元祖ロビンソンから受け継がれたもの、つまり、ロビンソン変形譚という物語形式そのものに内在していた「人間性の本質にかかわる問題」というテーマを考える際には、戦後の子ども向け作品のなかにはっきりとした連続性を見ることが出来る。

紙幅の関係上詳細な分析は別稿に委ねざるを得ないが、ここでは、最もわかりやすい例としてゲイリー・ポールセン (Gary Paulsen) の『ひとりぼっちの不時着』(Hatcher, 1984) についてのみ簡単に触れておく。これも『蠅の王』と同様に飛行機の墜落で幕を開ける物語で、パイロットが心臓発作を起こしてセスナ機がカナダ北部の森林地帯に落ちたために、唯一の乗客だった一三歳の少年が手斧一丁を頼りに生き延びていく過程を描いている。五四日間のサバイバル生活のなかで、少年の抱く肉への渴望は非常に生々しい形で描かれ、肉を食べることにつきまとう死のイメージもあからさまに表現

されるが、何より印象的なのは、湖に沈んでいた飛行機の中で魚に食われていたパイロットの死体を、主人公が見つける場面である。水中でぐらぐら揺れる「あまりきれいとはいえない頭蓋骨」(二二一頁)と主人公が対峙する場面には、豚の頭蓋骨と少年の対峙(三二四～二五頁)をクライマックスの一つに据えた『蠅の王』からの図像的な影響がみてとれる。少年主人公に、自分が食べていた魚がじつは人肉を食べていたという事実をつきつけるこの場面は、子ども向けの作品としてはかなり衝撃的な内容となっている。間接的とはいえ自らが行っていた食人行為に気づかせるといふ意味を持つこのエピソードは、他者としての食人種を我が身のうちへと引き戻した『蠅の王』を経由したからこそこの「肉食モチーフ」の展開といえるだろう。¹⁹⁾

以上のとおり、始祖『ロビンソン・クルーソー』で描かれた「肉食モチーフ」は現代の変形譚へも受け継がれているのであって、この点についてはまだまだ考察の余地が残されている。また、戦後の変形譚を追っていくと肉食サバイバーの減少という興味深い傾向にも気づかされることになる。近年では、肉類を最初から最後まで口にしないサバイバーが次々に登場しており、それも、道具や技術がないからとか、獲物がいないからといった理由ではなく、肉を食べる必要を感じていない、あるいは、自発的に肉食をやめるといふ展開すら見られる。²⁰⁾このような非肉食サバイバーにとっては、獣が狩りたてて殺す対象ではなく、しばしば保護の対象となることも特徴

的である。戦後の日本で出版されてきた子ども向けの変形譚におきいているこのような変化とその意味を考察することが次の課題となる。

本稿は、二〇一〇年五月八日に開催された日本児童文学学会東京例会において「サバイバーたちの食卓——食からみたロビンソン変形譚」のタイトルで口頭発表した原稿の一部に修正を加えたものである。

註

- (1) 英語では Robinsonade と表記されるこの文学用語に対して「ロビンソン変形譚」の訳語をあてたのは、岩尾龍太郎である(『ロビンソン変形譚小史——物語の漂流』、みすず書房、二〇〇〇年)。
- (2) 但し、続編第二部を加えて上・下巻とし『ロビンソン・クルーソー』のタイトルで出版している岩波文庫のような例外もある。
- (3) ジュール・ヴェルヌの『神秘の島』(The Mysterious Island, 1873) から、那須正幹『あやうしズッコケ探検隊』(一九八〇年)、エリザベス・ジョージ・スピア (Elizabeth George Speare) の『ユーパー族のしるし』(The Sign of the Beaver, 1983) まじり、多様な作品で言及されている。
- (4) サミュエル・ピアース『サミュエル・ピアースの日記』全十巻、白田昭ほか訳、国文社、一九八七～二〇一二年。
- (5) 川北稔『世界の食文化⑩イギリス』、農山漁村文化協会、二〇〇六年、六二～六五頁。また、リチャード・B・シュウォーツも当時の食生活を説明して「英国紳士は肉を好んだ」と結論づけている(『十八世紀ロンドンの日常生活』、玉井東助・江藤秀一訳、研究社出版、一九九〇年、二三八頁)。
- (6) 下層階級の食については、シュウォーツ、前掲書、一三四～三五頁参照。
- (7) アネット・ホープ、『ロンドン食の歴史物語——中世から現代までの英国料理』、野中邦子訳、白水社、二〇〇六年、九二～九三頁。

- (8) Daniel Defoe, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe*. London: Penguin, 1985, 113.
- (9) 植民地主義と深く結びついたこの時期の博物学とロビンソン変形譚の關係については拙著『女になった海賊と大人にならない子どもたち——ロビンソン変形譚のゆくえ』、玉川大学出版部、二〇〇九年、四五～四六頁を参照された。
- (10) 以下、壊血病の歴史に関して、Janet Macdonald, *Feeding Nelson's Navy: The True Story of Food at Sea in the Georgian Era*. London: Chatham Publishing, 2004, 154-66参照。
- (11) ちなみに、この間に行われたキャプテン・クックの第一回南太平洋探検(一七六九～七一年)は壊血病の犠牲者を出さなかった遠洋航海として名高いが、それは、糧食にザワークラウト(酢漬けキャベツ)が含まれていたうえに、航海途上で新鮮な食品を入手する機会に比較的恵まれたという幸運な偶然の結果であり、リンドの主張が認められて野菜や柑橘類が積み込まれたわけではない(Macdonald, 前掲書157)。
- (12) 『ロンブス』、『完訳ロンブス航海誌』、青木康征編訳、平凡社、一九九三年、二四〇頁。
- (13) セルカークが暮らした島は一九六六年にロビンソン・クルーソー島(Robinson Crusoe Island)に改名されている。
- (14) ピーター・ヒューム、『征服の修辭学——ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492-1797年』、岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳、法政大学出版局、一九九五年、二八〇頁。
- (15) ブリュノ・ロリウー、『中世ヨーロッパ食の世界史』、吉田春美訳、原書房、二〇〇三年、一三九頁。
- (16) 拙稿『The Coral Islandにおける少年と『野蛮人』——Ballantyneが描いた悪』、『多元文化』創刊号(名古屋大学国際言語文化研究科・国際多元文化専攻)、二五～三七頁。
- (17) ロリウー、前掲書、一五〇頁。
- (18) 原著で用いられている単語“long pig”(＝長ぶた)は、食用の肉を表す言葉として辞書にも載っている。
- (19) 『ひとりぼっちの不時着』が読者に提示するのは「自分たちも肉を食う者なのだ」という認識にとどまるが、対象年齢層のさらに高い作品では「食人譚」へと展開する場合もあるだろう。ちなみにこの作品の邦訳書の対象年齢は「小学生上級から」となっている(原著は一〇～一四歳)。なお肉食モチーフを扱う二十一世紀の変形譚としては、ゴードン・コーマン(Gordon Korman)『サバイバー地図にない島(一)——漂流』(Shipwreck, 2001)に始まる三部作や、ヤン・マーテル(Yann Martel)の『パイの物語』(Life of Pi, 2001)なども興味深い。
- (20) スコット・オデル(Scott O'dell)の『青いイルカの島』(Island of the Blue Dolphins, 1960)彦一彦の『猿島の七日間』(一九八九年)マイケル・モーパール(Michael Morpurgo)の『ケンスケの王国』(Kensuke's Kingdom, 1999)など、例多数。
- (使用テキスト)
 ウィース、ヨハン・ダビット、『スイスのロビンソン』、小川超訳、学習研究社、一九七六年
 ヴェルヌ、ジュール、『二年間の休暇』上・下、大友徳明訳、偕成社文庫、一九九四年
 ゴールディング、ウィリアム、『蠅の王』、平井正穂訳、新潮文庫、一九七五年
 デフォー、『ロビンソン・クルーソー』、海保眞夫訳、岩波少年文庫、二〇〇四年
 バラントイン、『さんご島の三少年』、大泉一郎訳、講談社、一九六〇年
 ポールセン、ゲイリー、『ひとりぼっちの不時着』、西村醇子訳、くもん出版、一九九四年

(二〇二二年九月二六日提出)